

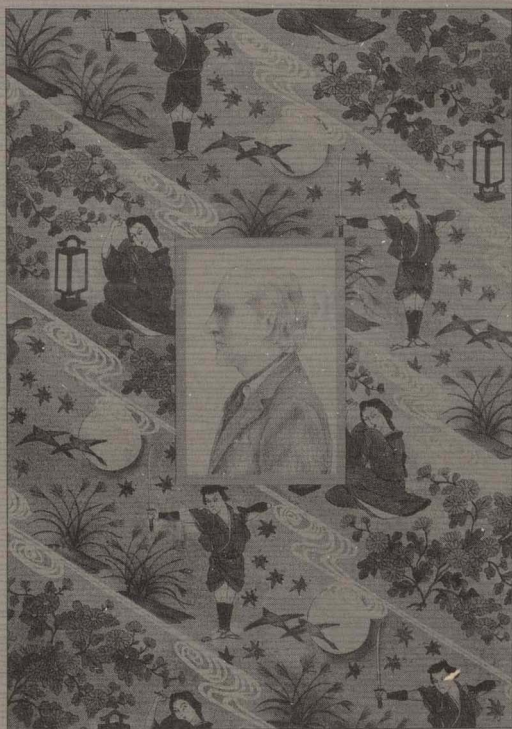
フ

創元ミステリ'90

探偵の秋あるいは猥の悲劇

岩崎正吾

Seigo Iwasaki



創元ミステリ'90

探偵の秋あるいは狼の悲劇

岩崎正吾



東京創元社

探偵たんでいの秋あきあるいは猥わいの悲劇ひげき

一九九〇年九月二十八日 初版

著者——岩崎正吾いわさきせいご

© Seigo Iwasaki 1990, Printed in Japan



発行者——平松一郎

発行所——株式会社東京創元社

東京都新宿区新小川町一—五 郵便番号一六二

電話 東京 (〇三) 二六八—八三三—(代)

振替 東京六一—五六五

印刷——暁印刷 製本——鈴木製本

乱丁、落丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

著者紹介

昭和十九年甲府市生まれ。甲府第一高等学校、早稲田大学文学部哲学科卒業。大学時代は劇団こだまに所属。昭和五十七年十二月、山梨ふるさと文庫を設立。昭和六十二年「探偵の夏あるいは悪魔の子守唄」でデビュー。昭和六十三年「風よ、緑よ、故郷よ」をもって「鮎川哲也と十三の謎」に参加。

目次

幕前 「殿様」が雪山で死んだ顛末と「気違い八田家」の人々 5

第一幕 遺書が公開され「気違い八田家」に嵐が起こりつつあること 23

第一場 老役者登場のこと 25

第二場 「殿様」が仕掛けた罠のこと 45

第三場 いよいよ八田家の惨劇が始まったこと 67

第二幕 思いもよらぬ殺人事件に「気違い八田家」の人々は右往左往のこと 91

第一場 正木警視の予感の中したこと 93

第二場 次なる「殺人劇」までのしばしの間のこと 115

第三幕 盲目の末娘、受難のこと 138

第三幕 さてもさても恐ろしき殺人のこと 159

第一場 「殿様」のノートが一人歩きをすること 161

第二場 人、それぞれの思いをいだくのこと 182

第三場 「殿様」のノートが追跡されること 209

第四幕 それぞれの秋、深まるのこと 231

第一場 未亡人と長女、対決の姿勢を強めるのこと 233

第二場 またもや惨劇のこと 255

第三場 探偵、推理のこと 278

終幕 それぞれの別れのこと 301

作者後書き 岩崎正吾 326

解説 有栖川有栖 327

探偵の秋
あるいは
猥の悲劇

登場人物

八田欲右衛門	八田家の当主	自殺
ふみ緒	現在の妻	
平馬	欲右衛門の次弟	八田奉公会理事長
左平次	末弟	八田観光社長
千佳	妹	死亡
薔薇子	長女	詩人
小百合	次女	
すみれ	末娘	盲目
高一	小百合の息子	中学生
リカ	娘	
連太郎	平馬の長男	八田興業重役
吉田 三郎	千佳の夫	八田田園開発社長 県会議員
石森 優一郎	八田交通社員	
栗林 完七	八田家の使用人	死亡
たけ	完七の妻	
昌平	栗林家の一人息子	
正木 修	山梨県警捜査一課長	
ゆう	正木警視の一人娘	大学生
矢島 隆男	八田家の主治医	
市川 乱菊	旅役者	
白菊	弟子	本名・綾小路三郎助

幕 前 「殿様」が雪山で死んだ顛末と「気違い八田家」の人々

さて、さて、これは偶然のことである。その日、旅館「白根莊」の若主人が獵に行かなかつたらば、お山は広い、死体は春先まで発見されなかつたらうと山小屋の爺さまはつぶやいたことがある。

いや、いや、獵に行つたとしてもだ、もし獵犬のトシキがはぐれなかつたら、やはり見つからなかつたべ、と麓の駐在はまくしたてた。

うん、そうだ、トシキはまだ子犬で獵を体験したのは初めてだもんな、これが先代のノボルだと主人の言うことを聞かずに飛び出してしまふなんてことはなかつたと、白根莊の若主人はあいづちを打った。因みに白根莊ではずっと、飼犬が生まれると時の総理大臣の名前をつける習慣になつている。ノボルの前の獵犬はカクエー、その前はエーサクであつた。

しかし偶然はまだあつたんだ、と後を言いかけて若主人は思い止まつた。死体の身元がわからないうちは、めつたなことを言うもんじゃない……。

大天狗岳の觀音平は、一面の銀世界である。深い雪の積もる尾根を渡ってくる烈風は、刃物で頬を切りつけてくるようだった。しかし、まあ、やっかいなものを見つけてしまったもんだと、

三人は共通の思いにかられながら、寒さに耐えて待つていた。

しかしながら若主人の苦心の偽装は、麓からやってきた所轄の南部署なんぶの捜査官たちにたちまち見破られてしまった。死体の周囲の雪を蹴散らして、痕跡を完全に消しきったつもりなのに、さすがに本職の刑事の目は節穴ではなかった。

「おい」と、三十がらみの色浅黒い刑事が若主人を呼んだ。振り返った目が氷柱つららのように冷たく、それを見た若主人はビクッとウサギのように跳ねた。

「はい」

「ここで小便をしたな」

「いえ、あの……」

山小屋の爺さまも駐在も、そろって若主人の方に視線を向けた。初めは呆れたような顔をしたが、すぐに視線が冷やかなものに変わる。死体に小便をかけるなんて何というバチ当たりじゃ、二人の目はそう言っている。厚いジャケットを着込んでいるのに、若主人の下着は大汗で濡れはじめた。

「あの、ですな……それは、その逆でして……死体に小便をかけたんじゃないなくて、小便をしたら雪の下から死体が出てきた、つまりそういうことなんです、はい」

「どっちにしても、死体に小便をかけたんじゃない」

蓬萊ほうらい小屋の爺さまが素っ気ない口調で言う。ここからいちばん近い山小屋なので、若主人は死体を発見するとすぐに蓬萊小屋に駆けつけたのである。

「あんたはわしに、一言もそんなことは言わなかったぞ」

今度は麓の村の駐在が、憤慨した口調を浴びせる。所轄署の刑事の前で、駐在は恥をかかされ

たような気持ちになったのである。

一転した二人の悪意を浴びて、白根荘の若主人は泣きたいような気持ちになった。そうだよ、俺はここで小便をしたんだ。し終わってひょいと下を見たら、雪が小便で溶けて穴が空いていたんだ。その穴から、爺さんの顔がのぞいていた。驚くまいか……俺はチンポコが縮みあがってしまつたぞ……。

あわてて蓬萊小屋まで走って、無線で麓の駐在に知らせたんだ。駐在がここまで登ってきて、変死だから所轄署に知らせなきゃならんと言つてまた無線で連絡した。俺に何の罪とががあるんだよ。雪の下に死体があるとわかつていて、小便をしたわけじゃ決してないんだ……。

若主人の言いわけが通じたのだろうか、反対側にいた年配の刑事が色黒の刑事をなだめる動作をして顔を雪に戻した。この刑事は禿頭の上に、黒い毛糸の帽子をかぶっている。八の字眉毛で、何とこの寒空に扇子を持っていた。まさかこれで風を入れようというわけではあるまいから、扇子は単なるアクセサリーなのだろう。刑事というより、売れない落語家のような風貌である。その年配の刑事は穏やかな声で言った。

「まあ、いい。死体発見の事情は、後でゆっくり聞こう」

年配の刑事は扇子をかざして、同行してきた二人の警官をさし招いた。二人とも寒風に頬を真っ赤にし、高校生のような顔をしていた。一人が持ってきたカメラで、顔以外はほとんど雪に埋もれている死体を撮影する。それが終わると二人の巡査に顎をしゃくつた。

「起こせ」

雪がまたかき除けられ、死体の肩が見えてきた。二人の巡査が死体の肩に手を置き、声を合わせて持ち上げた。雪が音をたてて割れた。ヒャアと山小屋の爺さまが、悲鳴のような声を上げた。

だが、いちばん仰天したのは、白根荘の若主人である。ザザッと音をたてて雪が崩れ落ち、中からまるで一枚の板のように硬直した死体が現れたからである。死体は若主人の目の前に、すつくと立ち上がった。若主人は二、三步飛びのき雪に足を取られて、悲鳴を上げてその場にひっくり返った。

恐怖におののきながらも、まじまじと目を開けて目の前の死体を見る。相当な老人である。禿頭に氷を張らせ、白い髭に氷柱をつけている。まさか小便をかけられた恨みではあるまいが、氷玉のような不気味な目で若主人を見つめていた。茶色のヤッケを着込み、同じ色の登山ズボンをはいていた。典型的な冬山登山の服装である。

山小屋の爺さまが身を乗り出して、死体をのぞき込んだ。冬山の遭難死体を何十体と見慣れている目である。この種の死体の鑑定にかけては、警察よりわしの方が年季が入っておるぞという負けん気をむき出しにする。

「やはり山に一人で来たのかのう。しかし、おかしいのう……」

爺さまは首をかしげる。八の字眉毛を上げて、年配の刑事が爺さまを振り返る。

「爺さん、何か不審なところがあるかね？」

爺さまは腕組みをし、小首を傾げる。

「冬山登山にしては、荷物が少ないのう。それにこの爺さん、相当な歳だぞ」

刑事もやや離れて、死体の歳恰好を眺めた。

「そうだな、爺さんくらしいの年配だな。七十という見当かな」

蓬萊小屋の爺さまは、雪の上で地団太を踏んだ。山小屋でもう半世紀を送っている大天狗岳の名物爺さんである。さすがに歳には勝てなくなったが、ほんの少し前までは天狗の生まれ変わり

かと言われた健脚の持ち主である。警察なんか屁とも思っていないかった。

「やい、わしはまだ六十八じゃぞ」

刑事は手にした扇子で、毛糸帽子に守られた禿頭をポンと打った。

「はい、それはしまった。余分なことを言ってしまった」

爺さまは年配の刑事の脇に、腕組みをしたまま座り込んだ。

「七十もの歳の人間がのう、冬山になんぞ来るかな。しかも、一人でじゃぞ」

年配の刑事も、毛糸帽子を打ちふり同意を示した。

「そりゃそりゃのう。どれ身元がわかるものを探してみるか」

そう言って刑事は、死体のヤッケに手をかけた。凍りついているのをバリバリと剝がして、ジッパーを引く。反対側から目付きの悪い刑事が手を添えた。二人は手の動きを合わせて、まるで板をひつ剝がすようにヤッケを両側に開く。

「ヤッ」と驚きの声を上げたのは、座り込んで身近で死体を見ていた山小屋の爺さまである。

「懐に手紙を抱いておるぞ」

駐在の巡査も白根荘の若主人も、その場にいた全員がいつせいに死体をのぞき込んだ。手紙は茶色の油紙に嚴重に包まれていた。そのために、初めは服にまぎれてよく見えなかった。目を凝らすと、爺さまの言う通りである。死体の胸のポケットに、油紙で防水のされた封書が差し込まれている。

八の字眉毛の刑事はにわか緊張した顔になり、丁重な手つきで封書を死体のポケットから抜いた。油紙を開け、中の封書を取り出そうとする。年配の刑事は包みをあけながら、誰にとまなぐつぶやいた。

「何じゃろな、えらく嚴重に包んであるが……」

爺さまが鼻をすすりながら言った。

「そりゃそうじゃろ、この雪じゃ、防水をせんことにゃ読めなくなってしまうわ」

刑事の手の中に一通の封書が顔を出した時、一同は「おおっ」と大きな叫びを上げた。表に墨で、鮮やかな文字が読み取れたからである。「遺書」と。

「やはり、自殺かあ。どうも変な死体だと思ったんじゃ」

そう叫んだのは、爺さまである。しかしそれには答えず、年配の刑事と色黒の中年刑事は厳しい視線を交わした。二人の若い警官も、厳肅な顔で二人の刑事を見守る。所轄署の署員たちの間に、緊張したものが漂った。遺書と書かれた封書には、死体の老人のものと思われる名前が記されていたからである。

「八田欲右衛門」——この名前に見覚えがあった。県内有数の名士である。その行方不明は、数日前の新聞にも大きく取り上げられていた。そして行方不明者の捜査願いが、家族を通して住まいのある所轄の玉穂署に提出されていた。その公報がつい最近、南部署にも回ってきたばかりである。

「おい」

中年の刑事は若い警官をうながした。

心得た警官は、「はい」と答えて山小屋の方に向けおりていく。無線で下に連絡するためである。

若い警官が腰をかかめるようにして走り出した時、尾根をごうごうと強い風が吹き抜けていった。

まったく何という礼儀知らずの連中であることよ、と蓬萊小屋の爺さまはカマドの前でつぶやいたことである。

蓬萊小屋からずっと麓に近い大滝小屋の中である。雪の中から掘り起こした死体をそこまで運び下ろした時、警察の無線が死体の身元確認に八田家の人々が登って来ることを知らせて来た。年配刑事の指示で、急遽、大滝小屋が双方の出会いの場に決められた。大滝小屋までは車で登って来られる。

爺さまが火を燃やしているのは、湯を炊くのと部屋を暖めるためである。大滝小屋も海拔千メートル近い高さである。さぞや、平地の人間には寒かろうと、爺さまは気をきかせたのに、やってきた連中は爺さまなど歯牙しがにもかけていない様子である。

先頭を切って小屋に入ってきたのは、体格のがっしりした中年の男である。ぐりぐりした目の上に、荒縄のような眉がある。この男は沈痛きわまりない顔をして入ってきて、大きな目で小屋の中をすみずみまで眺めまわした。当然、火を燃やしている爺さまを見たはずだが、路傍の石を見るように通過していった。

所轄署の年配刑事が進み出て、玉ネギの皮をむくように毛糸の帽子を脱いだ。中から玉ネギのようなつるりとした顔を出す。その天辺を向けて丁重にお辞儀をしたところを見ると、神社にある狛犬こまいぬのような顔をした男は警察の「偉いさん」なのだと言った。爺さまは見当をつけた。単なる山

の自殺者にしては扱いが物々しい。よほど死体の人物は大物なんじゃろと、薪をくべながら爺さまは好奇心むき出しの目で次に続く人物を見た。

すべるように入って来たのは、上品な物腰の中年婦人である。桔梗色の地味な着物の上に、黒い羽織を着ていた。まるで法事にでも行く服装じゃわい、この服装では車で来るしかあるまいと、爺さまは婦人の顔を穴の開くほど見つめていた。最初の人物とは正反対に、細面に目鼻がすつきりとまとまっていた。髪に白いものがちらはらと混じっているのと目尻の深い皺が婦人の年齢を五十代だと語っていたが、若い頃はさぞや美人であつたらうと思わせる。これは虫も殺さぬという楚々とした女じゃ、と婦人のまだ色香の残る襟足を見ながら爺さまは久し振りにぞくぞくするような思いになった。だが、この婦人も大天狗岳の名物爺さまを知らないのか、こちらには一瞥もせず小屋の中央に進み出た。

あとにどやどやと三人の女性が続いて来た。世の中のことに疎い爺さまの目には、噂に高い町のピンク・キャバレーの女どもかと映つたのである。とにかく赤、青、黄色などの極彩色のかたまりである。爺さまに敬意を払うどころか、目的が死体の人物の確認であることすら忘れているとしか思えない様子で、雪崩のように部屋に入り込んで来た。

小屋の中央に、古い戸板をはずして作つたにわか仕立ての台がある。雪の中から掘り起こした死体は、古毛布をかけてその上に横たえられていた。頭の位置に大きな顔の警察の「偉いさん」が立ち、その隣に楚々とした風情で婦人が立つ。最初の男は山梨県警本部の捜査一課長という要職にある警察官なのだが、紹介もされない爺さまたちにはもちろんわからない。

さすがに戸板のまわりに並ぶと、キャバレー風の三人の女どもも厳肅な顔になる。爺さまも白根荘の若主人も麓の駐在も、顔の皮膚を突っ張らせて立ち上がって戸板のところ近づいた。